

Visión de la sociedad patriarcal y las relaciones entre hombres y mujeres en Benito Pérez Galdós y Tanizaki Junichiro  
— A través del análisis comparativo de sus obras maestras —

ベニート・ペレス・ガルドス及び谷崎潤一郎の家制度・男女関係観  
— 両小説家の傑作の比較分析を通して —

Elena Gallego Andrada  
エレナ・ガジェゴ・アンドラーダ

El objeto de este estudio es analizar comparativamente las obras cumbre de dos de los escritores más universales: Benito Pérez Galdós (S. XIX - principios del XX) en España y Jun'ichiro Tanizaki (S. XX) en Japón para conocer detalladamente las características y puntos comunes de los sistemas patriarcales y las relaciones entre hombres y mujeres en ambos países y épocas.

Debido a que el escritor Benito Pérez Galdós no es apenas conocido en Japón, empezaremos el estudio haciendo una semblanza de la vida y obra de este autor, considerado el mejor escritor español del S. XIX, estableciendo un paralelismo con la vida y obra de Cervantes, de quien se puede considerar continuador.

Puesto que sus obras nos ofrecen un profundo análisis de la vida cotidiana y un vivo retrato del alma humana, veremos con qué exactitud y viveza han captado estos tres escritores la idiosincrasia y profunda esencia del pueblo español y el pueblo japonés en sus distintas épocas.

ベニート・ペレス・ガルドスは十九世紀のスペインにおける最も偉大な小説家、劇作家と謂われ、バルザック、ディケンズ、トルストイらと並び称され、世界中で高い評価を得、リアリズム文学の頂点でありながら、日本ではあまり知られていない作家である<sup>1</sup>。

ご存知のようにセルバンテスはスペイン文学における最高峰、最も大切な小説家であり、且つ、世界文学にとっても彼は極めて重要な人物である。

ベニート・ペレス・ガルドス (Benito Pérez Galdós) はそのセルバンテスに継ぐ大作家であるので、先ず、両作家との共通点と平行関係を見てから、本題の“ガルドスと谷崎の家制度と男女関係観”に入りたいと思う。

ミゲール・デ・セルバンテス (Miguel de Cervantes) はマドリード県のアルカラ・デ・エナレス (Alcalá de Henares) に 1547 年に生まれた。一方、ガルドスはカナリヤ諸島のラス・パルマス (Las Palmas de Gran Canaria, 1843) の生まれ。しかし、二人ともスペインを深く知り、全く違う身分の多くのスペイン人と出会った。セルバンテスの職業は徴税の役人だったため、スペイン中を廻り、まったく無名の一介の人間として、あらゆる階層の人間と出会い、関わりあった。こうした経験を通して自分とは全く違う人の立場に立つことや、様々なレベルの言葉を巧みに使い分けることが出来たのである。上流社会の洗練された言い廻しから最下層の人間のやりとりや卑語俗語に至るまで多様なスペイン語を自分の生活を通して知り尽くした。

フリアン・マリーアス<sup>2</sup>という文明評論家によれば、“セルバンテスのスペイン人らしさ (españolía) は、他者を退け、差別し、疎外することはおおよそ無縁であり、すべてを暖かく包み込む抱擁力に富み、優越感や自惚れは微塵もないという。セルバンテスは自惚れを知らない人であった。彼は好奇心に満ち、倦むことを知らず、温かい目で周囲を観ている。その姿勢はいつも外に向かって開かれ、異国や異文化に対しても敵意を抱く事は

1 現在まで、ベニート・ペレス・ガルドスの数多くの作品の中で、下記の三つしか日本語に訳されていない：『フォルトゥナータとハシタ「二人の妻」の物語』(2巻)、浅沼登記、水声社、東京、1997年。『マリアネラ』阿部孝次訳、彩流社、東京、1993年。『国史挿話』シリーズの『トラファルガル』高橋早代、大島正訳、朝日出版社、東京、1975年。

2 Julián Marías, *Cervantes en clave española* (スペインを解く鍵セルバンテス), Alianza Editorial, Madrid, 2003.

なかった。スペイン人であることを素直に受け入れ、それでいてスペイン人であることに縛られず、異文化の理解に向けて高く飛翔する翼の持ち主だった。セルバンテスを読むと、現在のスペインとは違うスペインに引き込まれていく。このことがセルバンテスに普遍的な価値を与え、スペインの枠を超えて多くの外国人をも魅了してきたのではないだろうか<sup>3</sup>。

ガルドスについて同じようなことが言える。1862年にマドリードへ移って、マドリード大学法学部に入学したが、法律の勉強よりも文筆活動に強い興味を抱き、ラ・ナシオン紙 (La Nación) の新聞記者となった。作家以外の仕事をしなかったガルドスはスペインとスペイン人を深く知るために、彼は電車の三等車に乗り、貧しい旅籠に泊まり、貧しい人々と付き合っ、スペイン中を歩き回った<sup>4</sup>。マドリードで、頻繁に“市民性を収集して来ます”、“Voy a recoger pueblo”と語った。つまり、小説のために、足しげくカフェに通って、独りテーブルに何時間も席を取り、周囲の人々の会話に耳を傾けたり、町中、とくに貧民街を歩き回って、その中の日常生活を丹念に観察したり、また、文名を馳せてからは、その名声に引かれて集まって来るブルジョワ階級の人々とも交際したりしていたので、小説の中の諸場面も、多くは自身の目で見たものの再現にほかならない。

どの地方に対しても熱い眼差しを向け、賛辞を惜しまず、二人の作品には、カスティージャ、アンダルシーア、バスク、カタルーニャ、アラゴン、バレンシアなど様々な地方の人々が登場する。これらの作中人物に対して、二人の深い愛情が見られ、彼らを通してスペインを廻る形でスペインとスペイン人について様々なことが話題となって出て来る。

斯くして、其々の登場人物を自分たちとは違う存在とは思わない。自分たちも一般の平民だと思っている。誰とも兄弟であるという意識が常に働いている。こうした理由からスペインの歴史と文化、且つスペイン各地の特徴や地域間の違いを知るためには、二人の作品を読むことが必須条件であると言える。

3 日本における『ドン・キホーテ』、京都外国語大学イスパニア語学科、京都外国語大学付属図書館、1997。

4 『フォルトゥナータとハシクタ』という小説には、ブルジョワに属している主人公であるフェニートとハシクタの新婚旅行では、スペインの多くの町を廻る。ガルドスは既にそれらの町を歩き回った故、当時のスペイン風景が詳しく描かれている。

二人の存在はスペインを大きく変えたと言える。人々は彼らの教訓に多くを学んだ。これはこの二人のもう一つの価値である。確かにこの二人なしには今日のスペインは理解し難い。二人が存在しなかったとすれば、スペインは違う国になったと思う。自分の中にこの二人が生きていないスペイン人の精神と知性は、恐らく貧しく、スペイン人らしさに欠けていように思える。逆に、この二人を読むことでスペイン人はさらにスペイン人らしくなるように思える。

斯くして、黄金時代のスペインを詳しく知る為にセルバンテスを読むのは絶対不可欠な条件であり、十九世紀や二十世紀の初めのスペインを知るためにガルドスを読むのは非常に重要なことだと言える。しかし、先ず、十九や二十世紀のスペインを知るために黄金時代、つまり、セルバンテスのスペインを知るべきである。

セルバンテスと聞くと、多くの人はきっと『ドン・キホーテ』を想い出すであろう。確かに『ドン・キホーテ』<sup>5</sup> (*Don Quijote*) は世界文学の中で際立つ傑作だが、セルバンテスの作品は他にも数多く書かれ、そしてセルバンテスの価値は必ずしも『ドン・キホーテ』に集約されるわけではない。私には『ドン・キホーテ』なしでもセルバンテスは十分に名の通る作家に思われる。そして興味あることにセルバンテス自身が最も気に入っていた自分の作品は『ペルシレス』(*Persiles*) という小説だった。

ガルドスの最高傑作は『フォルトゥナータとハシクタ、「二人の妻」の物語』(『*Fortunata y Jacinta*』 *Historia de dos casadas*)<sup>6</sup> だが、他にも百冊程あり、この作品なしでもガルドスは十分に名の通る作家に思われる。

ガルドスは十九世紀の偉大な作家として、1912年にノーベル賞にノミネートされたが、彼を妬んだ“学者たち”に受賞を妨げられた。しかし、1904年に受賞したスペイン作家が現在に全く名が知られていない、何故かというと、ガルドスと違って、優秀ではなかったし、現在性のない作家だと思う。歴史を振り返って見るとこのように筋違い、不正なことが少な

5 セルバンテス『ドン・キホーテ』(6巻) 牛島信明訳、岩波文庫、東京、1997年。

6 ベレス・ガルドス、ベニート『フォルトゥナータとハシクタ「二人の妻」の物語』(2巻) 浅沼登訳、水声社、東京、1997年。

Benito Pérez Galdós, *Fortunata y Jacinta, Dos historias de casadas*, Edición de Francisco Caudet, Ed. Cátedra, Letras Hispánicas, Madrid, 1982 (2 Tomos).



からずあったのではないだろうか。

ところで、二十世紀の日本最大の文豪の一人である谷崎潤一郎もノーベル文学賞にノミネートされただけでなく、1964年には日本で初めて全米芸術院・米国文学芸術アカデミー名誉会員に選出された。

セルバンテスとガルドスは二人とも素朴な人柄の持ち主であり、二人ともそれぞれの時代とともに、当時のスペインの貧困を感じ経済的に悲惨な生活を送ったことを多くの資料が物語っている。

セルバンテスは最も“スペインらしさ”を代表する作家であり、その作品はどれも奥行きが深く、豊かな人間性に溢れ、常に新しい視点に立った新しい解釈がなされうる作家である。ガルドスは、セルバンテスよりも後300年後のスペインに生きた人だが、しかし彼についても同じことが言えると思う。

二人の作品は、スペインを完璧に描写している。これは二人の作品から、一語一句にしみじみ感じられる。

因みに、日本語は大変に変化の激しい言葉で、明治時代の作品でも今日読むのは難しいが、スペイン語は逆にセルバンテスの時代のスペイン語でも多少の知識があれば十分に読める。セルバンテスのスペイン語を読むと、言葉で言い尽くせない感激を感じる。作品はどれも語法や内容は勿論、言葉の響きにまで美しさと愛情に満ちた非の打ちどころのない黄金時代の味のあるスペイン語で書かれ、人間精神の偉大さと寛容、権勢と卑俗が鮮やかに描かれている。ガルドスの言葉や文体はもう少し現在のスペイン語に似ているが、大体、同じことが言えると思う。尚、現在スペイン語に使われる決まり文句や表現などは、セルバンテスやガルドスの小説に既に見られる。

ガルドスはスペインの歴史や民衆の雰囲気、またマドリードのブルジョワ階級の分析を通して、非常に寛容な態度でスペインの現状を理解することにあらゆる情熱を傾けた。

彼の時代にはスペイン小説が衰退期にあったが<sup>7</sup>、彼は、十九世紀スぺ

7 しかし、当時ヨーロッパでは写実主義が盛んになり、最も代表的な小説、トルストイの『アンナ・カレーナ』、フローベールの『ボヴァリー婦人』などが既出版された。

イン写実主義の最高峰として、その状況を早く感じ取り、昔の輝きを取り戻せるように、自分の作品を通して、次の対策をした、即ち：

- 1) 歴史小説 (1873-1912) 新たな国民意識の高揚を通してスペインの歴史を記録し、反省し、小説の衰退の理由を探り出す。代表する作品は46巻からなる、『国史挿話』(*Episodios Nacionales*)<sup>8</sup>、であり、それぞれ異なった時代や主題を扱っている。例えば、スペイン独立戦争、絶対主義者と自由主義者の政治的闘争、1848年の革命、王政復古など。ガルドスは非常に生き生きとした語り口でスペインの十九世紀の歴史に小説風に迫っている。全体として見た場合、素晴らしい生命力を持った価値ある作品と言わねばならぬ。
- 2) 同時代小説：彼の時代を詳しく分析し、新興勢力となりつつあり、当時のスペインの要になりつつあったブルジョア階級や宗教的問題が大きな社会的反響を呼んでいることもよく取り上げる。そして、彼の反強権的で自由主義的な態度を表明するものとして一連の傾向を持った小説を発表する。

このグループに属している二つの小説 (異なる時期に書かれたのが) 『マリアネラ』と『フォルトゥナータとハシタ「二人の妻」の物語』に注目したいと思う。

その一つ目は、第一期の小説で、『マリアネラ』<sup>9</sup> *Marianela* (1878)、である。この小説には平民であり孤児である一人の若い女性 (マリアネラ) が登場する。それまで身の世話をしていた財産のある盲目の坊ちゃん (パブロ) が視力を回復し、彼女の (外見的な) 醜さ<sup>10</sup> に気づくのを見て悲しみの余り死んでしまうという繊細で心理的でドラマチックな物語である。しかし、視力を回復する前に、パブロは彼女の内面的な美しさや純粋な心を愛していた。回復すると、マリアネラのことをすっかり忘れ、財産のあ

8 ペレス・ガルドス、ベニート『トラファルガル』高橋早代、大島正訳、朝日出版社、東京、1975年。

9 ペレス・ガルドス、ベニート『マリアネラ』阿部孝次訳、彩流社、東京1993年。

Pérez Galdós, Benito, *Marianela*, Edición de Joaquín Casaldueiro, Ed. Cátedra, Madrid, 1983.

10 マリアネラが赤ん坊の時に、酔っ払っていた母親の腕から風車の中にすべり落ちてしまった。幸いにも死を免れたが、顔にその事故の傷跡が残っているのである。

る対等な身分のある従妹<sup>11</sup>と結婚し、二人ともマリアネラを召使として雇おうとする。

言うまでも無く、当時のスペインには身分の違う人間同士との結婚は全く認められず、全く不可能であった。加えて、スペインの当時の家制度は特徴として同族結婚が頻繁な習慣であった。スペインのアクスブルク王朝は代表的な例だと思われる。本朝の最後の王であったカルロス二世 (Carlos II, 1661-1770) はその族内婚の結果を受け継ぐ事となった。

マリアネラとパブロはお互いにプラトニック愛を抱いていたので、「愛とは」「美しさとは」「貧富の差とは」「身分の違う人間の恋愛とは」「人生とは」「死とは」という精神的な主題が深く分析され、取り上げられている。

『マリアネラ』という小説は、二十世紀日本文学の頂点である谷崎潤一郎 (1886-1965) の大作『春琴抄』<sup>12</sup> (1933) と共通点や類似性<sup>13</sup>があることは明らかである。

谷崎とガルドス、其々の作品の主題は身分の違う盲人と盲人でない相手との恋愛物語である。両作品は非常に深い内省分析がある。両作家が女性の世界を深く知り、女性の感情や内面的な世界を男性のそれより良く緻密で、巧みに描写した。

しかし、この共通点はこの二つの作品よりも、谷崎の『細雪』<sup>14</sup>とガルドスの『フォルトゥナータとハシクタ、「二人の妻」の物語』という両作品にもっと明確に見える。

スペイン文学において、女性が主人公となることが珍しくはないが、日本文学において、女性が主人公となるのはめったにないことである。しかも、女性に対しての自分の関心を描写し、女性を崇拝する谷崎のような作家が存在した事は非常に珍しいことである。

11 後ほど見られるのだが『フォルトゥナータとハシクタ』という小説でも主人公であるフアニートも自分の従妹であるハシクタと結婚する。

12 谷崎潤一郎『春琴抄』新潮文庫、東京、2008年。

13 Masae Kochiwa, Un estudio comparativo de “Marianela” de Galdós e “Historia de Shunkin” de Tanizaki, Cuadernos CANELA, 1990, pp. 28-29.

14 谷崎潤一郎『細雪』3巻、新潮文庫、東京、2008年。

Tanizaki Junichiro, *Las hermanas Makioka*, versión española de M. Menéndez Cuspinera, Ed. Seix Barral, Biblioteca Formentor, Barcelona, 1965.

『マリアネラ』がガルドスの第一期の作品として、かなりロマン主義の影響を見られるので、『春琴抄』がプロレタリア文学後に書かれ、ロマン主義の香りも漂っている本質的な耽美主義を描く。この短編の思想は谷崎自身の体験が重なっている。三回結婚した谷崎は型にはまっていた伝統的な男女関係や家制度に失望し、幸せな結婚の基礎とは男性側は女性を崇拝することと考えていた。従って、主人公である盲目の三味線奏者春琴に丁稚の佐助が献身的に仕えて、マゾヒズムを超越することとなる。

一方、家族との生活を創作活動と両立しがたいものと考えたガルドスは、恋人は何人も持ちながら、一生独身を貫いた。

結局、二人の作品には身分の低い方が身分の高い方から結婚相手として拒否されて、彼らの犠牲者となる。しかし、日西文化の違いのため、結末も異なってくるのである<sup>15</sup>。

運命の皮肉な出来事だが、晩年のガルドスは視力の衰えと経済的に苦境に悩み、1913年には視力を完全に失って1920年に他界した。

また、谷崎の『春琴抄』は、重厚な写実主義的イギリス作家のトーマス・ハーディー (Thomas Hardy, 1840-1928) の『グリーブ家のバーバラ』(Barbara of the House of Grebe, 1891) という小説に影響を受けたということが良く知られている。しかし、筆者は英文学については全くの門外漢であるので、本稿では宮崎隆義の研究<sup>16</sup>の抄録を引用するに留めたい:

*“Is it well known that “Barbara of the House of Grebe” by Thomas Hardy furnished Tanizaki Jun’ichiro with some influence for writing Shunkinsho. In this essay, the conceivable effects, positive and negative, upon Shunkinsho by “Barbara of the House of Grebe” are investigated. Hardy wrote in his diary that “love lives on propinquity, but dies of contact”. In this vein, Shunkin and Sasuke seem to keep their love alive in a closed,*

15 この点は非常に興味深いと思われる。例えば、名誉を汚された時、江戸時代の日本人は切腹するが、黄金時代の欧米人は名誉を汚した相手の血を殺す。

16 宮崎隆義『春琴抄』と「グリーブ家のバーバラ」盲目と接近。Shunkinsho and “Barbara of the House of Grebe: Blindness and Propinquity、言語文化研究 Journal of language and literature, Vol. 2 (19950220) pp. 167-179、徳島大学、ISSN:13405632.

*mental world of their own. The two lovers establish “propinquity” by means of the difference in social rank and physical blindness. In a seemingly peculiar relationship they hanker for an unchanging love yet avoid the permanence and stability of marriage. In “Barbara of the House of Grebe” marriage causes emotional changes in Barbara towards Edmond Willowes, her first husband, and Lord Uplandtowers, her second husband. Barbara, by “watching” Edmond’s burnt face, changes her feeling towards him, causing her to shun him, “averting her face”, “shutting her eyes” and “covering her eyes”. Hardy’s literature device of Barbara’s aversion of the gaze seems to be an influence on Tanizaki’s motif of blindness in Shunkinsho. Sasuke becomes blind by his own hand, the reason for this act being to avoid watching Shunkin’s scalded face and his changing feeling toward her. Unlike Barbara, Sasuke becomes able to preserve Shunkin’s beauty in his own memory for eternity by his self-mutilation, just as the blind Shunkin holds his physical entity in her own mind through the senses of touch and hearing”.*

これから、『フォルトゥナータとハシクタ』と『細雪』という二人の最高傑作の比較を試みたいと思う。

『細雪』は昭和十年代で既に戦争の空気が色濃く漂う世界第二次大戦直前（1936-1941）の大阪・船場、徳川の時代から続く老舗木綿問屋（蒔岡商店）を舞台としている。格式を重んじる本家の長女・鶴子と分家して神戸・芦屋に住まいを構え、妹たちを優しく見守る次女・幸子、数多くの縁談を断り続け、婚期が遠のいていく三女・雪子、ハイカラで活発、手に職をつけて自立の道を切り開いていく四女・妙子。時代は戦争に向けて大きく動き出している中でも、優雅を忘れない美さで、それぞれの想い、それぞれの人生を歩んでゆく蒔岡家の四姉妹を通して、当時一般の女性の日常生活を細やかに語ろうとするのである。

一方、ガルドスの「世界文学の一記念碑」と称される長編小説『フォルトゥナータとハシクタ』は1885年から書き始められ、1886年から翌年に

かけて世に出された。

両作品では途方も無い出来事などは語られていないが、平凡な日常生活が非常に詳細に、ありのままに描写されている。ガルドスの作品には、十九世紀マドリードの風景、生活や風俗、当時の階級社会、成り上がりのブルジョワ階級（サンタ・クルース家など）と下層階級（フォルトゥナータや彼女と係わる人物など）の格差や各階層の男女関係など、数多くの人物を通して、生き生きとした社会の概観が鋭い観察眼で描かれている。

『フォルトゥナータとハシタ』の粗筋を簡潔に述べると、裕福な商人の家に育った我儘な放蕩息子ファニートは、下層階級の美しい娘フォルトゥナータを見初め恋に落ちるが、やがて彼女を捨てて、良家の従妹<sup>17</sup>である貞淑な娘ハシタと結婚する。一方、傷心のフォルトゥナータに一目惚れした、風采の上まらない薬学生マクシは、周囲の反対を押し切って彼女と結婚する。斯くして、「人妻」となったフォルトゥナータにファニートは再び興味を抱き、改めて彼女に近付いてくる。

様々な人物の中で、最も完璧に描写されているのが若くて<sup>18</sup>、美しく、無邪気で同時に個性の強い下層階級の娘フォルトゥナータである<sup>19</sup>。ガルドスは彼女を当時の階級社会における貧富の差や家父長制<sup>20</sup>、更に自らの無知故の犠牲者として紹介している。

フォルトゥナータは恥知らずのファニートに何度捨てられても、彼の誘惑に抗えず、あくまでも彼を信じ、盲目的に愛し抜くのである。

こうして、マリアネラと同様に孤児であるフォルトゥナータはファニートに騙され、生計を立てられないため、幾人もの男と暮らし、彼らの暴力の犠牲者ともなる。

17 上述したように『マリアネラ』における主人公パブロも従妹と結婚すること。

18 フォルトゥナータはファニートと出会った際に19歳で、彼の二番目の子を出産した折に出血のため、26歳でこの世を去った。

19 スペイン文学の中で、ドン・キホーテと共に、彼女が最も説得力のある人物として、完璧に描かれていると思われる。

20 日本でも明治民法に採用された家族制度であり、親族関係のある者のうち更に狭い範囲の者を、戸主と家族として一つの家に属させ、戸主に家の統率権限を与えていた制度である。江戸時代に発達した武士階級の家父長制的な家族制度を基にしている。明治時代の女性の立場や家制度における日常生活の様々な困難や苦しみは、志賀直哉の『白い線』という短編小説から伺い知ることができる。江戸時代の「三従教（女性が従うべき三つの道。即ち家にあっては父に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は子に従うこと）（広辞苑）」に盲目的に従う理想的な女性像は森鷗外の『安井夫人』という短編小説に描かれている。

因みに、家庭内暴力という現象は、ご存知のように、人間の誕生とともに始まり、現在まで存続し、減少するどころか増加傾向さえ見られる。言うまでも無く、この現象が家制度と密接な関係があることは自明の理である。

一方、フォルトゥナータに強い好奇心を抱いていた新妻ハシタがフアニートに彼女のことを執拗に尋ねると、フアニートはフォルトゥナータを弄んだことを少しの罪悪感を感じることなくあっさりと認める。新婚旅行中の二人のこの会話を眺めよう：

“…かわいそうなフォルトゥナータ！かわいそうなピトゥーサ！皆があの子をピトゥーサと呼んでいたのを話したっけ？話さなかったかい？それではこれから話してあげよう。はっきりしているのは…あの子はもうぼくのものではない…そうだ…もうひとつははっきりしているのは、誰でも自分の責任は取らなければいけない…あの子はぼくのものではない。ぼくはあの子を騙した。たくさん嘘をついた。あの子と結婚すると思わせた。わかったかい？…ぼくは悪党なのだろうか！…笑われても仕方がない…ぼくがついた嘘のすべてをあの子は真に受けて…そうだ、下層階級の人には純朴そのもので、まるっきりばかなのさ。立派な言葉を使えば、すべて真に受けてしまう…ぼくはあの子を騙し、あの子の操を奪って、しゃあしゃあとしている。男なんて、そう、若い紳士面の男なんて、さもしい奴だ。貧民の操など、玩具扱いできると思っている…そんな顔をして見ないでくれよ、きみ。確かにきみの方がもっともだ。ぼくは恥すべき人間で、きみに軽蔑されても仕方がない…だって、女性はみな神の造り給うたものだからきみはいうのだろうか…？ぼくはあの子と散々楽しんでからあの子を捨てて、路頭に迷わせた…、あの子は雌犬と同じ運命を辿るのだ…そうだろう？”<sup>21</sup>

こうして、家制度という社会通念の中で育ったため、男尊女卑的な考え方に何ら疑問を抱かない彼の妻ハシタは次の様に答える：

21 ベニート・ベレス・ガルドス『フォルトゥナータとハシタ「二人の妻」の物語』浅沼登訳、水声社、東京、1997年、上巻、第一部、94ページ。

「許してあげるわ」と、妻は応えて（…）「わからず屋になるつもりはないし、できない相談をしてくれと頼む気もないわ。男は皆結婚前に必ず夜遊びをするものなのも知っているの。でも断っておくけれど、これから浮気をしたら、うんと焼き餅を焼くから。でも、過ぎた事柄については焼かないわ」（…）「でも、ばかねえ！わたしが怒ると思ったのかしら？…」おばかさんねえ！そうではないよ。あんたのご乱行が面白いのだから。なかなか粋なところがあるわ。」<sup>22</sup>

要するに、この話から明確に読み取れることは、普遍的に家父長制や男性中心社会が、その都合によって勝手に、女性を二つのグループに分ける：婚姻により家を存続させるための女（地女的な者：ハシタ）と快楽を満たすための女（遊女的な者：フォルトゥナータ）、即ち、ハレ（非日常）とケ（褻）（日常）という概念が、日本のみならず、遠く離れたスペインの男女関係にも投影されているのである。女は男性から見ると“ハレの女”と“ケの女”に別けられるということについては、『遊女の文化史』の著者佐伯順子先生によれば、

“かつては、生産の性と快楽の性は、ともに畏怖さるべき「聖なる性」であり得たはずなのだが、いまや前者は日常的世界に住む妻に、後者は廓という非日常的世界に住む遊女に分化して負担されることとなった。招婿婚から嫁入り婚への移行に伴い、こうしたヘレ（非日常）の女、ケ（日常）の女の二極分解が生じ、文学の中に両者の対比が露わにみられるようになる。これが近世に注目すべき遊女文学の新たな特質となるのである。生活態度や美意識のすべてにわたってみられる、ハレの女、ケの女の対照的な姿を、西鶴の筆の中に眺めよう：

明暮、世をわたる女の業を大事に、手づからべんがら糸に気をつくし、末々の女に手袖を織らせて、わが男の見よげに、始末を本とし、龐も大きくべさせず、小遺帳を筆まめに改め、町人の家に

22 同上 78 ページ。



ありたきは、かやうの女ぞかし。『好色五人女』<sup>23</sup>

(…) その残酷な生活実態については諸書で明らかにされているが、本書では留意しておきたいのは、そんな中で遊女たちにみられる、あくなき「ケの女」への憧憬である。男たちが日常世界の女—ケの女を所帯じみていると評価し、美しい女は遊女に、との幻想を抱いていたのに対し、遊女自身はハレの世界を離れ、愛する一人の男のものとなること—「妻」とよばれる女になることを切に望んでいたのである。<sup>24</sup>

『細雪』にも地女と遊女というはっきりとした区別が認められる：

“いったい父は早くから道楽で身が持てなかった人なので、当時としては割合に遅い二十九歳に、自分より九つも若い母と結婚したのだそうであるが、親類の年寄などに聞くと、さしもの父もひとしきりはお茶屋へ足が遠のいた程、夫婦仲がよかったものであった、それに、父がぱっぱとした豪快な気象であるのに反し、母は京都の町家の生れで、容貌、挙措、進退、すべてが「京美人」の型に嵌まっており、互いの性質に正反対なところのあるのが、いかにも好い取り合わせ、端から見ても羨ましい夫婦であったと云う。が、それは幸子などの記憶にない遠い昔のことで、彼女が覚えている父は、いつも家を外に遊び歩いていた父であり、母はそう云う夫に満足して何の不平もなく仕えていた町方の女房であった。そして母の出養生が始まってからは、父の遊び方が一層傍若無人に、「豪遊」と云う形式にまで発展して行ったのであったが、でも幸子は父が大阪より京都の方でより多く遊んだこと、自分もしばしば祇園の茶屋へ連れて行かれたことがあり、父が馴染みにしていた芸妓を何人か知っていたこと、などを今から考えると、父はやっぱり京美人型が好きだったのではないであろうか、と思えるのであった。”<sup>25</sup>

23 佐伯順子『遊女の文化史（ハレの女たち）』中公新書、14版、2003年、200-201ページ。

24 同上 204ページ。

25 谷崎潤一郎『細雪』下巻、新潮文庫、東京、2008年、68-69ページ。

オーストリアの精神医学者ジークムント・フロイトによれば、“男性にとって女性との三つの已むを得ない絆があるという、即ち：出産する女性（ケ、la paridora）、人生の同伴者として女性（ケ、la compañera）、男性を墮落させる女性（ハレ、la corrompedora）、言い換えれば、人生の流れを通して変化していく母の像”<sup>26</sup>。

この小説においては、男女関係に関して、母性と父性が極めて重要な役割を果たしており、女性主人公二人の其々の台詞を通して絶えず語られる。

こうして、墮落させる女性（遊女＝ハレの女）とされたフォルトゥナータは同伴者で出産する女性（地女＝ケの女）になることを望む：“私こそ彼（ファニート）の子を産んだのだから、彼の正式な妻である”。

一方、不妊症のハシントは（＝社会的な身分を失いつつある<sup>27</sup>）その為、妄想に取りつかれて、猫の鳴き声を赤ん坊の泣き声と聞き違える程となる。

ファニートの「ケの女」になろうとしたフォルトゥナータは出産時の出血多量で死ぬ直前、産んだばかりの彼の赤ん坊をギリエルミーナ（ハシントの友人）を通してハシントに譲る。斯くして、フォルトゥナータは寛大にも、子供を産めない強迫観念に苦しんでいたハシントを「出産する女性」にしてやる。言い換えれば、社会的な身分の無いフォルトゥナータは、ハシントを母親にしてやることにより、彼女に社会的な母としての資格を賦与した。

26 Sigmund Freud, *El motivo de la elección del cofre*, Amorrortu Ediciones, tomo XII, Buenos Aires, Argentina, pag. 317. 筆者訳。

27 明治時代の日本には「七去」、即ち女房が離縁される正当な理由があった：「父母に順ならず」「無子（“三年添って子なきは去る”、言い換えれば、夫婦が一緒になって三年間子供ができなければ、妻は離縁されてもしかたがないのだ、とは言われた）」「淫」「妒：嫉妬深いこと」「悪疾（悪しき病あれば去るべし）」「多言」「竊盗」。

礼記の「大戴礼」にあらわれ、日本では、江戸時代に女大学などの書物によって一般化した。離婚の際には三行半とも称される離別状が書かれた。

三行とは、①子の親に対する三つの行い。養と喪と祭。三道。②「周礼（地官、師氏）周の実践的教育の目標。人の重んずべき三つの行いとして、不父母に孝、賢良に友、師長に順」（広辞苑）。脚注20では「三従教」に触れ、「七去」と共に「五障（女人がもっている5種の障礙（しょうげ）、すなわち梵天王・帝釈天・魔王・転輪聖王・仏身となり得ないこと。法華経提婆達多品の得。いつつのさわり。五礙（ごげ）。五つの雲）」も含めて、この三点は、男性中心社会が勝手に女性に背負させた「七五三」と呼べるのではないのでしょうか。この“女の「七五三」”という社会通念は、男女関係史における最大の屈辱的な汚点で、大昔から日本の女性が受けざるを得なかった精神的暴力とも言えましょう。

ブルジョワ階級の登場人物より強い道徳観のあるフォルトゥナータは、最初は憎んでいたハシントを知らず知らず愛するようになる。進歩主義であったガルドスは最後に、ライバルであった二人の女性の間に連帯感を生み出すことになる。

因みに、ガルドス自身も1907年から1915年まで、彼の最後で最大の愛と思われたテオドシア・ガンダリアスという下層階級の若い女性と恋愛関係を結んだ。

ガルドスは、当時の歴史的な出来事を伺い知ることの出来る、社会・政治的な状況を、『フォルトゥナータとハシント』という小説に映し出す。

ブルジョワ階級に極めて期待していたガルドスはスペインに国民にとってより良い国を築くための1868年の革命が成功を収めずに終わった結果を見て大きく絶望した。

ハシントの不妊症を通して、平民を利用し、偽善的で自己中心的であるブルジョワ階級の政治・社会に対する積極性の欠如を象徴する傍ら、下層階級に生まれながら全ての社会的な人間的な関係の中心や頂点であるフォルトゥナータの豊穡を通して下層階級の誠実、その他の美德や輝きのある有望な将来を象徴する。

斯くして、ブルジョワ階級のサンタ・クルス家の跡継ぎを産んで、下層階級のフォルトゥナータは彼らの救い主として現われ、彼らの犠牲者となる。救い主としての役割を果たしたフォルトゥナータは最後に死なざるを得ない。

この小説では鳥類（鳥、鶏、雌鳥、鳩など）が大きな象徴となっている。フォルトゥナータとフアニートの最初の出会いの直前、ガルドスはマヨール広場の市場で巧みに雌鶏を絞めている鶏屋を詳細に描写している。フォルトゥナータの運命を予兆する場面：彼女の運命は雌鶏と等価となり：ブルジョワ階級に搾取される。

ブルジョワ階級の内での結婚制度（見合い・政略結婚）に妨げられ、ガルドスは、二つの小説の下層階級の女性主人公マリアネラとフォルトゥナータがブルジョワ階級に属していた最愛の男性と憧れの結婚が出来ずに、彼らの犠牲者となり死なせざるを得ない状況展開となる。

下層階級に属している彼女たちはブルジョワ階級に打ち負かしてしまうが、

下層階級と彼女たちは歴史において主人公になるための道を歩み始めた。

同様に、『春琴抄』の佐助も身分の違う春琴の犠牲者となり、『細雪』の蒔岡家の姉妹も当時の不正で不平等な家父長制度社会の犠牲者となる。

当時、スペインでは家制度が強く働いていたため、サンタ・クルズ家は、長男ファニートの誕生に大喜びであったし、彼は幼少の頃から通称“ドファン (Dauphin, スペイン語で、“El delfín”)<sup>28</sup>”と呼ばれていた。この出来事からファニートに跡継ぎが無いことがサンタ・クルズ家にとって大きな絶望であることは想像に難くない。

日本の家制度で長男（戸主）が果たす極めて大きな役割に関して強調する必要性は無いと思う。しかも、男と女の人生での役割を象徴するかのよう、昔から田舎では赤ちゃんのお宮参りの時、男の子の額には「大」、女の子の額には「小」という字を書く習慣が未だに存続している<sup>29</sup>。

家父長制や家制度の無意識な犠牲者であり、蒔岡家の長女鶴子は本家の戸主<sup>30</sup>として家を継ぎ、次女幸子は分家<sup>31</sup>の戸主となり、先代の父から譲

28 フランス王太子、第1王子。政治家などの後継者。

29 柳田国男の『阿也都古考』によれば、これは正式には「あやつこ（阿也都古）」と言い、平安時代の昔に始まるという。当時は、「大」ではなく「犬」の字を、赤ちゃんの額に墨で書いた。（『藤原為房の日記』）もともと神聖なものを示す印で、「×」「+」とも印され、それが変化して「犬」と書かれるようになった。

30 戸主は、家の統率者としての身分を持つ者であり戸籍上は筆頭に記載された。このため、戸籍の特定は戸主の氏名と本籍で行われることになる。家の統率者として家族に対する扶養義務を負う（ただし、配偶者、直系卑属、直系尊属による扶養義務のほうが優先）ほか、主に以下のような権能（戸主権）を有していた。家族の婚姻・養子縁組に対する同意権 家族の入籍又は去家に対する同意権（ただし、法律上当然に入籍・除籍が生じる場合を除く）家族の居所指定権 家族が戸主の同意なしに居所を定めた場合や婚姻・養子縁組した場合における、家籍排除権 戸主の地位は、戸主の財産権とともに家督相続という制度により承継される。相続の一形態であるが、戸主の死亡を前提とした制度ではなく、死亡以外にも隠居、国籍喪失なども相続開始原因とされていた。また、家の統率者としての地位の承継を含むので、遺産相続と異なり常に単独相続である。家督相続人（新戸主）となる者は、旧戸主と同じ家に属する者（家族）の中から、男女・嫡出子庶子・長幼の順で決められた上位の者、被相続人（旧戸主）により指定された者、旧戸主の父母や親族会により選定された者などの順位で決めるようになっていたが、通常は長男が家督相続人として戸主の地位を承継した。新たに家が設立される形態として分家、廃絶家再興、一家創立が、家が消滅する形態として廃家、絶家がある。

31 ある家に属する家族が、その意思に基づき、その家から分離して新たに家を設立することをいう。本家の統率の観点から、分家するためには戸主の同意が必要とされた。

り受けた蒔岡商店という家業の暖簾を守り、家を継ぎ、本家と分家との付き合いが一大関心事となる。一方、四女妙子は始終恋愛事件を起して姉たちを梃摺らせている。

両家の戸主にとって、もう一つの大きな心配事は三女雪子の結婚（見合い結婚）である。姉妹の中で最も美人であるが、なぜか縁遠く、三十路に入っても嫁げず、彼女の社会的な身分が疑わしくならないように、姉の幸子夫婦が奔走している。なるほど、小説は雪子の見合いの件から始まる<sup>32</sup>。

「なあ、こいさん、雪子ちゃんの話、又一个あるねんで」

「そう、——」(…)

「井谷さんが持って来やはった話やねんけどな、——」

「そう、——」

「サラリマンやねん、MB 化学工業会社の社員やて」

「なんぼぐらいもろてるのん」

「月給が百七十八円、ボーナス入れて二百五十円ぐらいになるねん」

「MB 化学工業云うたら、仏蘭西系の会社やねんなあ」

「そうやわ。——よう知っているなあ、こいさん」(…)

「その人、仏蘭西語出来はるのん」

「ふん、大阪外語の仏語科出て、巴里にもちょっとぐらい行てはったことあるねん。会社の外に夜学校の仏蘭西語の教師してはって、その月給が百円ぐらいあって、両方で三百五十円はあるのやて」

「財産は」

「財産云うては別ないねん。田舎に母親が一人あって、その人が住んではる昔の家屋敷と、自分が住んではる六甲の家と土地とがあるだけ。——六甲のんは年賦で買った小さな文化住宅やそうな。まあ知れたもんやわ」

「それでも家賃助かるよってに、四百円以上の暮し出来るわな」

「どうやろか、雪子ちゃんに。係累はお母さん一人だけ。それか

32 『細雪』の時代から現代まで日本では結婚観がどのくらい変遷してきたのかを伺う知るため、上野千鶴子・信田さよ子『結婚帝国女の岐れ道』講談社、東京、2004年、をご参照ください。

て田舎に住んではって、神戸へは出て来やはれへんねん。当人は四十一歳で初婚や云やはるし、——」<sup>33</sup>

家制度があった『フォルトゥナータとハシタ』の時代にも家を存続させる為に見合い結婚が多かった。見合い結婚したフアニートの両親が、自分の結婚に関して語っている父の次の節を眺めよう：

両親が有無をいわせず、おまえと結婚するのだとわしに話したとき、体中ぞっとしたものだ…! おまえをどんなに怖いと思ったか、今でも覚えている。とにかく、お互いの両親が何から何までお膳立てをしていたのだから。猫でも掛け合わせるようにわしらを結婚させて、一丁上がりというわけだ。結果は上手くいったけれど、こんなふうにしてでっちあげられた家庭で上手くいかず、大変なことになった例がいくらでもあるからな…! まったくお笑いだ! おふくろから、おまえと結婚しろと命ぜられたとき、おまえと何か喋らなければならぬのが一番心配だった。とにかく、おまえに何か話さなければならなかったのだからな…。いやはや、汗びっしょりになってさ!“でも、一体おれはあの娘に何を話したらいいのだ? 思いつくのは『ごきげんよう』だけで、それ以上は見当がつかないのだから…”<sup>34</sup>。

全く同様に、フアニートの母親が、自分の息子と姪のハシタが赤ん坊の頃、二つの揺籃の中で眠る二人を眺めた時に、“絶対に、この子たちを揺籃から婚礼の床まで移してやる”と自分自身に硬く約束する。

日西の両作家は出来事よりも、人物の性格、人柄、個性などの方に注目している。先ほど示したように、両作家が女性の世界を深く理解し、女性の感情や内面的な世界を、男性のそれよりも緻密に描写した。両小説では男性登場人物の台詞を通し、彼らの単純さや女性に比べ深い内面的な世界の欠如を明確に語っている。

33 谷崎潤一郎『細雪』上巻、新潮文庫、東京、2008年、5-7ページ。

34 ベニート・ペレス・ガルドス『フォルトゥナータとハシタ「二人の妻」の物語』、浅沼登記、水声社、東京、1997年、上巻、第一部、20ページ。

谷崎とガルドスは、其々の時代の家父長制の中で男性中心的、男尊女卑的な不安定で不平等な社会の犠牲者である女性像を彼らの小説で生き続けさせることを目指した。

知識の無い国民は操られ易いので、当時『細雪』が政府機関によって禁止された傍ら、ガルドスの小説も当時検閲されたし、ガルドスの死後にも発禁処分となった。

ノベル賞の候補者でもあった二人の作家の、自国の国民に対する愛情は、人間の弱さを十分認識しており、人間であることの条件に大きな関心を寄せる精神に遺憾なく表現され、寛容で抱擁力のある態度を持って、人間を見つめながら、其々の国の魂の本質の深さを捉えた。

## 参考文献

- Cabezas, Antonio, *La literatura japonesa*, Ed. Hiperión, Madrid, 1990.
- Caudet, Francisco, *El mundo novelístico de Galdós*, Biblioteca Básica de Literatura, Monografías, Ed. Anaya, Madrid, 1992.
- Cervantes, Miguel de, *Don Quijote*, Ed. Cátedra, Madrid, 1977.
- セルバンテス『ドン・キホーテ』(6巻) 牛島信明訳、岩波文庫、東京、1997年。
- Ciplijauskaitė, Biruté, *La mujer insatisfecha*, Ed. Edhasa, Barcelona, 1984.
- Freud, Sigmund, *El motivo de la elección del cofre*, Amorrortu Ediciones, tomo XII, Buenos Aires, Argentina.
- Kochiwa, Masae, Un estudio comparativo de “Marianela” de Galdós e “Historia de Shunkin” de Tanizaki, Cuadernos CANELA, 1990, pp. 28-29.
- Gullón, Germán, *Fortunata y Jacinta, El escritor y la crítica*, Ed. Taurus, Madrid, 1986.
- Mariás, Julián, *Cervantes en clave española*, Alianza Editorial, Madrid, 2003.
- 宮崎隆義『春琴抄』と「グリーブ家のバーバラ」 盲目と接近。Shunkinsho and “Barbara of the House of Grebe” : Blindness and Propinquity、言語文研究 Journal of language and literature, Vol. 2 (19950220)

pp. 167-179、徳島大学、ISSN:13405632.

Ribbans, Geoffrey, Varey, J.E., *Dos novelas de Galdós: "Doña Perfecta" y "Fortunata y Jacinta"* (Guía de lectura), Ed. Castalia, Madrid, 1988.

Pérez Galdós, Benito, *Fortunata y Jacinta, Dos historias de casadas*, Edición de Francisco Caudet, Ed. Cátedra, Letras Hispánicas, Madrid, 1982 (2 Tomos).

*Marianela*, Edición de Joaquín Casaldueiro, Ed. Cátedra, Madrid, 1983.

ベニート・ペレス・ガルドス『フォルトゥナータとハシクタ「二人の妻の物語」(2巻)、浅沼登訳、水声社、東京、1997年。

『マリアネラ』阿部孝次訳、彩流社、東京1993年。

『トラファルガル』高橋早代、大島正訳、朝日出版社、東京、1975年。

佐伯順子『文明開化と女性』新典社、東京、1991年。

『遊女の文化史・ハレの女たち』中公新書、東京、14版、2003年。

Tanizaki, Junichiro, *Las hermanas Makioka*, versión española de M. Menéndez Cuspinera, Ed. Seix Barral, Biblioteca Formentor, Barcelona, 1965.

谷崎潤一郎『細雪』3巻、新潮文庫、東京、2008年。

『春琴抄』新潮文庫、東京、2008年。

Tsurumi, Shunsuke, *Ideología y literatura en el Japón moderno*, Ed. El Colegio de México, México D.F., 1980.

上野千鶴子『女遊び』学陽書房、東京、二十二刷発行、2001年。

上野千鶴子・信田さよ子『結婚帝国女の岐れ道』講談社、東京、2004年。



